

2021年
(令和3年)
12月10日

むっぴ

石井十次の会 会報

291号

石井十次に学ぶ

高鍋町 井手口あけみ

私は38年の教職生活を延岡・日向で過ごした。出張などで延岡から宮崎に向かうとき、電車を利用すると、高鍋駅の海側に「孤児の父 石井十次の誕生の地」と書かれた碑がみえる。私は石井十次のことをほとんど知らなかった。その碑を見るたび、教職に身をおくものとして知らなければと思いつつもその機会を持つこともなく過ぎていった。

10年ほど前、退職と同時に夫の生まれ故郷である高鍋に居を移した。町の周辺には緑豊かな田園が広がり、宮田川と小丸川の穏やかな流れ、海にも近いその風景は素晴らしく、歴史的にも興味深い町であった。町では保育園など石井十次に関連する施設もあり、行事もいろいろと行われていた。

図書館で『石井十次』の本を見つけた。児童向けの本であったが借りて読んだ。医師になれという親や世話になった医者への期待も捨て、出会った一人の少年を守るべく孤児たちのために生きようと考え、即実行した十次。その決断の速さに私は驚いた。どうしても記念館を訪ねたくなった。

石井記念館へ行く道を夫に聞き、ひとり車で出かけた。集落と田畑の続く道を走ってようやくたどり着くことができた。記念館の前には青々とした稲田が広がり、心地よい風が吹いていた。受付を済ませ、施設を教えていただき、資料館に入った。

資料館には、十次の様々な資料が展示してあった。十次自らが書き残したものも多くあり、彼の情熱と几帳面さを知ることができた。



密室教育

十次が一人の少年と正座し向かい合っている写真が目にはいった。間違ったことをした子供と、じっくりと向かいあっている姿である。「密室教育」といわれるもので、どんな子供も変わるんだ、育つんだと信じ、実践している姿である。

自分の教職生活を振り返るとき、授業と部活動指導に追われ、我が子

とさえ、じっくり向かい合うことがないまま過ごしてきた私は、その光景が非常に新鮮であった。

私のような体験は、多くの教師たちも経験しているのではないだろうか。みっちり組まれたカリキュラムの中で、教材研究や生徒指導に追われ、一人一人の子供たちとじっくり向かい合う時間はなかなか作り出せない。教師の働く時間の多さについてようやく政府も動き出したが、ゆったりとした時間の中で子供たちと接する学校環境が作られることを望みたい。

教室として使われていた『静養館』で驚いたのは、そこに展示されていた絵画作品であった。画家・児島虎次郎の作品で、そのすばらしさに感動した。しかし、光や外気から作品を守る手だてがなされていないのがとても気になった。(今年の夏 記念館を訪ね、作品が「研修館」に移されており、ほっとしました。)

3年前、地域婦人連絡協議会の西都・児湯大会で、十次の会の会長である橋田和実氏の講演を聞いた。それがきっかけとなって石井十次の会に入会させていただいた。その後は友愛会から届く「ゆうあい通信」を通して情報を得ている。今年は緑田の上を泳ぐこいのぼりやその周辺に植えられたカンナの花を見に行ったりした。

今日の日本では、親が我が子を虐待する事件や、子供たちが友をいじめ、死にいたらしめるという事件が多発している。行き場のない、ほっとする場を持たない子供たち。子供を生み育てていくという自覚が欠落した親。豊かな日本といわれながら、優しさや思いやり、人間同士のつながりがどんどん薄れていってる。

こんな時代に石井十次について知ること、学ぶことは意味があると思う。高鍋の学校ではその取り組みが実践されている。この取り組みが児湯地区、更には宮崎県内へと広がることを期待したい。

また、江戸中期、高鍋藩秋月氏の出である上杉鷹山（秋月治憲）は、米沢藩の藩主となって質素儉約、殖産興業（養蚕：織物）、田畑の開墾などによって藩財政を立て直し、飢饉の時には、隣県の人をも含む民衆を救っている。

このような先人が語り継がれていくことを望みたい。私も彼らに関することや高鍋の歴史について学んでいきたい。



自画像 児島虎次郎作

給付型の奨学生対象者を財源確保のうえもっと増やしたい

奨学生選考委員長 竹之下悟(編集委員)

1 本年度も給付型の奨学生 2名に決定

令和3年度の給付型の奨学生2名が7月3日の選考委員会において決定した。この制度も4年目。

卒園生を対象に就学を容易にし学業を継続終了させることを目的とする。

月額2万円。創立時の1万円支給額は受給者の負担軽減を考慮して2年目から倍増。

受給資格に学力優秀・品行方正は掲げてはいるが就職には縛りはまったくない。これも2年目から縛りのない形に変更した。

本年度の対象者は9名。卒園生の大学等進学率はここ数年で51%と高まっている。

学力が高く志のしっかりとした卒園生に成長しているからこそ。これすべて、児嶋草次郎理事長を中心とした友愛園等の日々の真摯な取組の成果でもある。

対象者が9名存在しながら児嶋理事長からはわずか2名のみ推薦。

そこには、基金との兼ね合いから最小限かつ・しかも確実に決定をとの理事長の控えめな遠慮も働いているのではと推測してしまう。

ともかくにも、石井十次の会としては、なかんずく奨学金選考委員会としては給付型の奨学生基金が長期間安定持続できることが最大の課題であり続ける。

2 奨学金基金の安定化【財源確保】に向けての協力に感謝・・・そして今後も

奨学金基金の永久的な安定化【財源確保】を選考委員長を務めている竹之下は強く願っている。

ありがたいことに、基金寄付の報告が「むつび」通信6月号43件・7月号6件もあったと掲載されている。

奨学生を増やすことは、子どもを育てる「友愛園」と支える「十次の会」とが車の両輪となって進むこと。

会員の継続的な協力に感謝すると共に引き続きよろしくお願いします。

《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介

【日南市】佐藤 彦空

【高千穂町】押方 彰一

【宮崎市】河内 克典

【東京都】十川 美穂子

★ご寄付をいただきました（敬称略）

（奨学金基金へ）

【都城市】持永 ナミ子

【東京都】柳田 せい子

【新富町】山西 三重子

【美郷町】橋口 究

★10/21～11/21の資料館来館者

団体・グループ 78人

個人 27人

計105人

ここまでの掲載者は編集委員会開催の都合により11月20日までのものとしています。

★1月号の通信発送作業はお休みです。

友愛社で発送してさせていただきます。なお、2月号の発送作業は2月9日(水)10日(木)の予定です。

**通信の発送作業のお手伝いをしていた
だけのボランティアの方を募集しており
ます。簡単な作業です。
興味のある方は下記までお問い合わせ
ください。**

●友愛園玄関正門前に友愛社の案内標識が立っていて、そこから104年前に岡山孤児院から移築され、国の有形文化財になった方舟館が奥に見えます。この方舟館を「十次の会」の事務所として使わせて頂いて居りますが、友愛社のシンボルとして残して欲しいと思います。その為には、補修工事等で多額の費用が必要となります。その事を確実にするには新会員の増加も望まれます。皆様のお知り合いで、ご協力を頂ける方が居られましたら、会員獲得方宜しくお願い致します。



友愛社正門付近の佇まい

●収穫感謝祭(一般の方を対象)は、昨年につき中止になりました。なお、園生だけの感謝祭は「勤労感謝の日」に開催されました。

※ 編集後記

むつび巻頭の1～2ページは、高鍋町在住の井手口あけみ氏から玉稿を頂きありがとうございました。感謝致します。

新型コロナウイルス新規感染者は、少なくなりましたが、今度は、石油類の高騰に困ります。

良い師走であって欲しいですね。

・・・文責 生駒

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

社会福祉法人 石井記念友愛社

☎ 884-0102 宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1

後援会「石井十次の会」

TEL/FAX 0983-32-4612 メール yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp